

ウナギの種苗調査

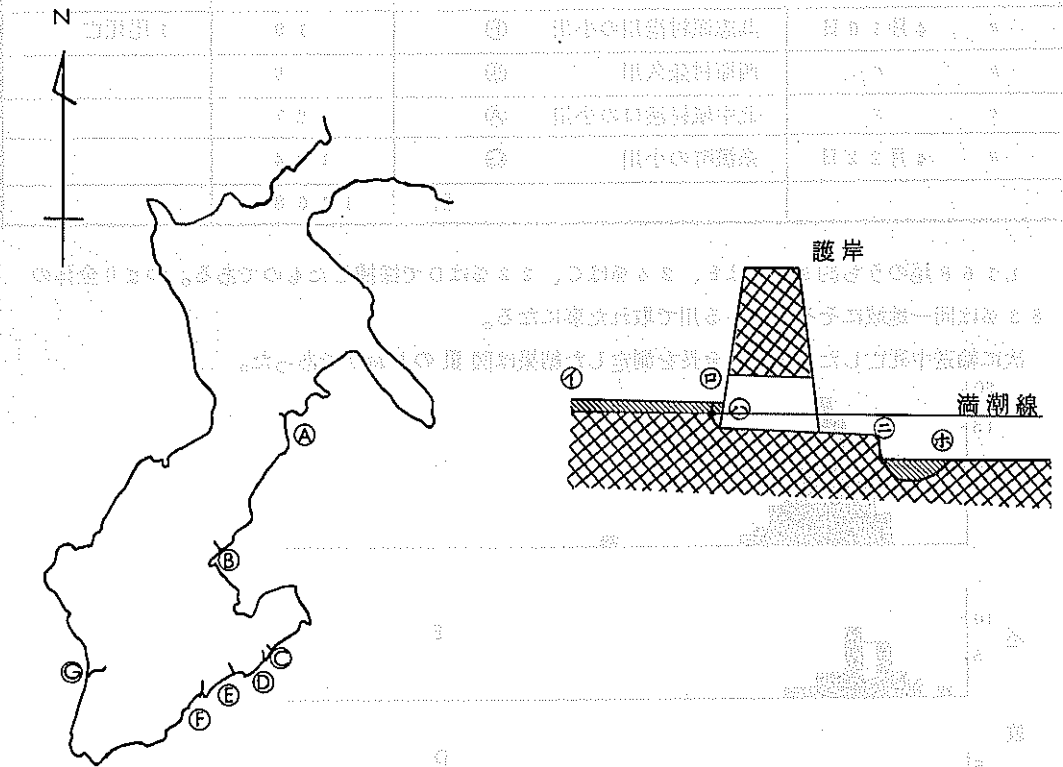
担当 新崎盛謙
伊野波盛仁
島袋新功

まえがき

従来のシラスウナギの調査結果から11月から5月にかけて全琉的に溯河がみられるが、今のところ数量的には僅かである。そこで採捕量の増大と、少ない資源を効果的に利用する意味から溯上後のシラス又はクロコを採捕し、養殖種苗として利用出来ると思われたので首題の調査を行なった。その概略を報告する。

調査方法および場所

調査場所は図1に示すように、主に沖縄本島南部を調査した。調査場所の大部分は名称のない小川なので仮にA,B,C,D,E,F,Gとした。調査個所の状態を模式的に示したのが図IIで、このせき止があるのはC,E,Fで、A,B,D,Gにはせき止はなく、そのまま海へと続いている。



図I 調査河川

図II セキ止の模式図

せき止口ローハ部の高さは約40cm~50cmで高潮時でも海水はこの部分を越えないようである。イ、ロ、ハ、ニ、は絶えず水が流れハニ部は藻がはえている。ホの部分は上方からの流れの影きようで水たまりとなっている。

A、B、D、G. の各川では藻や砂の中にひそんでいるウナギを、C、E、Fではハニ部についているウナギをタモ網で採捕した。

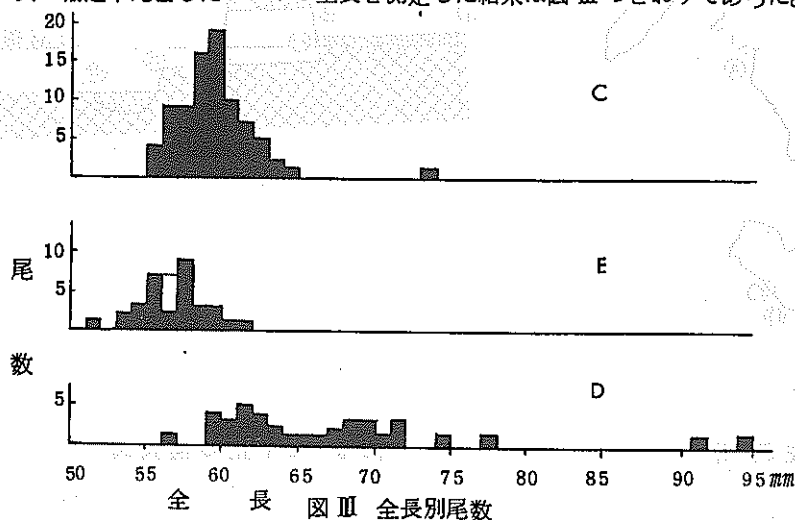
調査月日および採捕結果は表Iに示すとおりである。調査期間中に採捕した総数は1,168尾であった。備考欄の数字は採捕地より試験場への輸送の途中斃死した尾数である。

表I 各河川別の採捕尾数

調査月日	採集場所(図Iに示す場所)	尾数	備考
1970年4月13日	知念村志喜屋 ㊶	253	38尾死亡
" 4月14日	糸満町の小川 ㊷	37	
" 4月15日	知念村志喜屋 ㊸	285	84尾死亡
" "	玉城村奥武の小川 ㊹	434	32尾死亡
" 4月16日	具志頭村港川の川 ㊺	19	1尾死亡
" "	西原村兼久川 ㊻	9	
" "	北中城村渡口の小川 ㊼	27	
" 4月22日	糸満町の小川 ㊽	104	
	計	1168	

1,168尾のうち約37%はE、24%はC、22%はDで採捕したものである。つまり全体の83%は同一地域にそそいでいる川で取れた事になる。

次に輸送中死亡したウナギの全長を測定した結果は図IIIのとおりであった。



これまでの沖縄におけるシラスウナギの調査結果では溯河直後のシラスウナギの全長は62mmを越えないので、これを基準にして、それ以下をシラス、それ以上をクロコとみた場合、Dでは36%、Eでは100%、Cでは89%がシラスウナギである。つまりせき止の部分で採捕したものの大部分、もしくは全部がシラスウナギで、せき止のない川で採捕したものは大部分がクロコであった。前述したように、C・D・Eの各川は同一地域に面していることから、同時期に溯河したものとみることが出来よう。ウナギの大きさに差が生じたのは、溯河時期、生活環境の差異、特に天然飼料の多少によるものと思われる。

要 約

1. どんな小さな川でも、常に淡水の流入さえあればシラスウナギの溯河がみられ、従って採捕も可能である。
2. せき止のある川では、それによってシラスウナギの溯上がそ止される。そこで溯上ごとに、せき止部分にシラスがすみつき、採捕が容易である。
3. せき止もなく、直接海にそそいでいる川では砂や藻中のクロコの採捕が可能である。

執筆担当 新 崎 盛 謙

鹿児島県立総合研究センター